

大場磐雄と大場コレクション 4

1. 大場コレクションの概要と整理の経過

(1) 大場磐雄氏と大場コレクション

大場磐雄氏（1899～1975）は、『神道考古学講座』の刊行など、神道考古学を体系化した業績で知られているが、その背景には昭和20（1945）年まで内務省神社局考証課・神祇院考証課に勤務した経験がある。また、周辺に古墳や古社が現存しないものの、祭祀遺物の出土が認められた静岡県洗田遺跡を昭和2（1927）年に踏査した際、夕日を背景とした三倉山の神々しい山容を拝して「一種の靈感に打たれ」たことが、氏をして神道考古学の道に誘う導火線となったという（註1）。この洗田遺跡の報告をはじめ（註2）、宮地直一氏の名を借りて執筆した『神社と考古学』や（註3）、神道考古学の基礎的論考を収めた『神道考古学論攷』は（註4）、いずれも内務省在職中に執筆したものである。

その後、恩師であった折口信夫氏の勧めもあり、昭和23（1948）年に博士の学位を取得し、翌年には本学教授に就任した。学位論文は『祭祀遺蹟—神道考古学の基礎的研究—』に収録されている（註5）。一方、学内においては、國學院大學考古學會の会長として後進を育成し、『国学院大学考古学研究報告』シリーズの刊行や考古学専攻の設置等、研究・教育環境の整備に尽力された。

大場氏の研究業績は、上記の諸単著や『大場磐雄著作集』などに収録されているほか、本プロジェクトにおいて整理を進めている大場コレクションが残されている。大場コレクションは氏の没後、遺言に基づいて本学が寄贈を受けた資料であり、多数の写真資料・図面等は調査当時の生々しい成果を今日に伝えるものとして評価が高い。

(2) 大場コレクションの整理経過

本プロジェクトでは、初年度である平成11年度から大場コレクションの整理を継続して行ってきた。大場資料目録の「縄文時代編」・「弥生時代編」・「古墳時代編」、大場写真資料の「平出遺跡編」・「登呂遺跡編」、そして「常陸鏡塚古墳編」・「信濃浅間古墳（桜ヶ丘古墳・妙義山古墳群ほか）編」については、既に事業報告（註6）、或いは電子情報として公にしている。

今年度は、従来の資料化に引き続き、「大場資料目録—Ⅰ.旧石器時代編—」・「大場資料目録—Ⅴ.歴史時代編—」の整理を行なった。ただし、歴史時代編については、その前半26箱の整理が完了している。その内、旧石器時代編については、『大場磐雄博士資料目録Ⅰ』に掲載した。

大場資料は、氏が自ら調査・蒐集した資料と、寄贈を受けた資料の双方が含まれており、写真・実測図・拓本のほか、報告書等の書類・地図・カード・新聞等の切り抜き・絵葉書・書簡などからなる。保管ケースにはその内容毎に名称が付されており、各ケース内には更に内容物を細分した分類袋が納められている。整理にあたっては従前の箱番号・名称等を尊重し、目録の目次はこれに従った。

なお、整理は深澤太郎・山添奈苗の両名が担当した。

2. 大場資料目録—V. 歴史時代編—

「V. 歴史時代編」は50箱を越え、大場資料中最多の資料数を誇る。資料の性質上、社寺の宝物など、「VI. 祭祀編」と重複する部分が少なくない。特徴としては、仏寺関係の資料も充実している点をあげることができよう。全般的には鏡や瓦関係の資料が多数を占めているが、今回報告するのは歴史時代編の前半に相当するV-26までであり、仏像・神像や金石文関係の資料が多く認められる。

大場資料には、氏の調査対象のほか、調査の主たる対象ではないが、それに附随して蒐集した資料や贈呈を受けた資料がある。年月日が記載されたものについては、『樂石雑筆』や略年譜を参照することにより、いかなる経緯で蒐集した資料であるかが、ある程度明らかになろう。

試みに歴史時代編の内、これまで整理した資料を瞥見すると、その成果が論文などに直接反映された資料としては、昭和18(1943)年に実施した群馬県赤城神社の調査で得た鰐口(V-6-6)が古い。昭和24(1946)年の山梨県日下部遺跡(V-9-2)については、略年譜は12月17日から21日まで滞在したとあるが、資料自体には24日の日付が記されている。これは、帰京後に資料の贈呈を受けたものであろうか。このような資料は、公刊された論文・市史・神社誌などが知られており、追跡調査が比較的容易である。

一方、昭和37(1962)年7月に行なった岩手県・福島県の蕨手刀調査では、中尊寺の梵鐘(V-2-18)を調査し、昭和40(1965)年に実施した東京都南秋津遺跡の調査に際しては、近辺の神社(V-3-9)を調査している。

もっとも、大場資料はそれ自体に価値があることは言うまでもない。しかし、具体的な活用方法を見出すためには、このような作業を通じて資料の性格を見極める作業が求められよう。

3. 追記—昨年度報告の補訂—

昨年度の『大場写真資料—常陸鏡塚古墳編・信濃浅間古墳(桜ヶ丘古墳・妙義山古墳群ほか)編—』に関する解説で、筆者は「桜ヶ丘古墳は長野県松本市本郷(旧東筑摩郡本郷村大字浅間・飯治洞)に所在する直径約15mの円墳である。埋葬施設は副室を伴う小規模な竪穴式石室であり、天冠・竪櫛・勾玉・丸玉・小玉・白玉・直刀・鉄剣・鉄鉾・鉄鏃・衝角付冑・三角板鋌留短甲・頸甲が出土した。古墳時代中期後半に位置付けられる。」と記している。

しかし、これは報告書刊行時の知見をそのまま転載したものであり(註7)、その後に提示された見解について付記しておくべき所、これを書き漏らしていた。すなわち、その後の滝沢誠氏による再調査によって、三角板鋌留と認識されていた資料は、長方板革綴短甲、並びに三角板革綴衝角付冑であることが明らかになっているのである(註8)。

編集時に、上記の点が脱落していることに気付いたが、訂正することは適わなかった。一部に誤解を招いたとすれば誠に遺憾であり、この場を借りて、お詫びの上訂正するものである。

(深澤太郎)

註

- 1) 大場磐雄 1960 「神道考古学生い立ちの記」『具体例による歴史研究法』 吉川弘文館
- 2) 大場磐雄 1927 「南豆における特殊遺跡の研究(一)」『中央史壇』13-6
大場磐雄 1927 「南豆における特殊遺跡の研究(二)」『中央史壇』13-7
大場磐雄 1927 「南豆における特殊遺跡の研究(三)」『中央史壇』13-8
- 3) 宮地直一(大場磐雄) 1940 『神社と考古学』考古学講座16 雄山閣
- 4) 大場磐雄 1943 『神道考古学論攷』葦芽書房
- 5) 大場磐雄 1970 『祭祀遺蹟—神道考古学の基礎的研究—』角川書店
- 6) 山内利秋 2001 「資料編 大場磐雄と大場コレクション1」『平成12年度 國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』國學院大學學術フロンティア事業実行委員会
加藤里美 2002 「資料編 大場磐雄と大場コレクション2」『平成13年度 國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』國學院大學學術フロンティア事業実行委員会
深澤太郎 2003 「資料編 大場磐雄と大場コレクション3」『平成14年度 國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』國學院大學學術フロンティア事業実行委員会
- 7) 大場磐雄・原嘉藤・金谷克己 1966 『信濃浅間古墳』長野県東筑摩郡本郷村教育委員会
- 8) 滝沢誠 1988 「長野県松本市桜ヶ丘古墳の再調査」『信濃』40-10